

【第42回城戸賞 佳作】

『大仏と小鹿』

岡田 鉄兵

〈あらすじ〉

大木雅二は定年退職になり、妻のくみ子と穏やかな生活を送っていた。

ある日、くみ子に乳がんが見つかる。初期だったため、手術は無事に成功した。しかしそれをきっかけに、くみ子は亡くなった前の夫の子供を引き取りたいと言い出した。

突然の事に動揺する雅二。乗り気ではなかったが、全く譲らなくみ子に最後は根負けしてしまった。

家にやってきたのは北田亜美、小学五年生。

挨拶や礼儀ができ、明るく性格も良い。小学生とは思えない、完璧な女の子だった。

誰からも好かれるタイプだが、雅二は気に入らなかった。子供らしさがないというのだ。

そんな折、くみ子が倒れた。そしてそのまま亡くなってしまふ。亜美の夏休みの宿題の為、暑い中での庭仕事が原因だった。

雅二と亜美の二人だけの生活が始まる。雅二は妻の死後、何もやる気がなく引きこもる。一方、亜美は真面目に学校へ通っていた。

二人の関係はグクシヤクした。だが亜美が過去に辛い経験をしているのに、前を向いて生きている姿に感動し、雅二は立ち直る。お互いのワダカマリも徐々に消えていった。

雅二はモスクワ五輪のボクシング日本代表選手だった。くみ子は亡くなる直前に近くにジムができたと言っていたのを思い出す。

ふらつと立ち寄ってみると『還暦ファイト』というチラシを見つけた。60歳前後のアマチュアボクサーが試合をするというものだった。雅二はこれだと思い、出場を決める。そしてたった一週間の練習で試合に挑んだ。

雅二は善戦したが、KO負けに終わった。

亜美は、なぜ試合をしたのかを聞く。生まれ変わるために戦った。これからは二人で助け合いながら、暮らして行こう。雅二と亜美は本物の家族になった。

以上

【登場人物表】

大木 雅二 (60) 無職  
大木 くみ子 (60) 雅二の妻

北野 亜美 (11) 小学五年生

谷 茂 (60) 雅二の友人  
谷 伝次郎 (90) 茂の祖父

生駒 さくら (26) 教師

丸山 健 (44) ボクシングジム会長

医師

学生

監督

選手 1・2

生徒 1・2・3

その他

○ 東大寺大仏殿・表

初夏の陽射しをあびる世界最大級の木造建築物。

参道を通り、中に入っていく観光客たち。周りには、掃除をするお坊さんの姿もある。

○ 同・大仏殿内

柱の穴をくぐる修学旅行生、売店でお土産を買うカップル、隅々まで真剣に見ている老夫婦がいる。

中央に鎮座するご本尊の巨大仏像。

東大寺盧舎那仏像、通称奈良の大仏さん。威厳があり、有り難みのある表情だ。

そこに声が忍び込んでくる。

医師の声「乳ガンです」

○ 飛鳥総合病院・診察室

胸のマンモグラフィやエコー画像がモニターに映っている。

医師が淡々と説明し、大木くみ子（60）が冷静に聞いている。

隣の夫、大木雅二（60）は顔が引きつっている。

医師「早期なので再発の可能性も低いでしょう」

くみ子「先日、いただいた資料を読ませてもらったので大体は理解できました」

医師「ご家族の方、ご質問はございますか？」

雅二がサッと席を立ち、頭を深く下げる。

雅二「よ、よろしくお願ひします」

静まり返る室内。

医師「はい、お座りください。（話を変えて）では、手術のスケジュールですが」

医師は事務的な口調で喋り続ける。

ゆつくりと椅子に座り直す雅二、不快そうな顔だ。

○ 奈良公園・園内

西日が差す時間。

外国人観光客が多く、鹿にせんべいをあげて楽しんでいる。

そこを歩いてくる雅二とくみ子。

雅二はまだ不機嫌そう。

くみ子「奈良に住んでても、観光地には来ないもんやね。(息を吸い込み) 久しぶりに鹿のフン嗅いだわ」

雅二「……」

くみ子「なに怒ってんの？」

雅二「別に」

くみ子「いつも以上に無口やんか」

雅二「あの医者が気に食わん。ロボットみたいで冷たい」

くみ子「そら毎日、患者診てたらああなるで。それにウチはステージ1や。冷たくしても大丈夫な客やねん」

雅二「(怒って)……」

くみ子が雅二の顔をじっと見て、笑いだす。

雅二「何がおもしろい？」

くみ子「アンタのあだ名、ダイちゃんやろ」

雅二「今さら、なんや」

くみ子「苗字が『大木』やからと、ずっと思ってたけど、ホンマは大仏に似てるからやっつてんな」

雅二「谷が言うてたんか？」

くみ子「誰でもええやん。でもそれ聞いたとき、笑ったわ。髪は天パで、怒ったらブスっとして大仏さんにそっくりやもん」

と大笑い。

雅二「あの喋りめ」

仏頂面で歩く雅二、その顔を見て余計に笑いが止まらなくなるくみ子。

くみ子「そんなに怒りなや。帰りにダイちゃん的大好物の『田村屋』の कोरोツケ買ったから」

雅二「いらん」

と早歩きになる。

くみ子は笑顔でついていく。

○ 大木家・表（夕）

木造二階建て住宅、小さな庭もある。

周りは田んぼが多く、住居がポツンポツンと建っている。

夕陽であたり一面が赤く染まっている。

○ 同・居間（夕）

晚ご飯を食べている雅二とくみ子。

おいしそうにコロツケを次々平らげている。

くみ子「やっぱり、このコロツケが日本一、いや世界一、いや銀河系一やわ」

大きくうなずく雅二。

くみ子「ウチな、死ぬ確率5%やって」

雅二「（絶句）え」

くみ子「消費税より低いやん」

雅二「しかし……」

くみ子「20回手術したら、1回亡くなるて考えたら怖いかも」

雅二の箸が止まる。

くみ子は気にせず食べ続ける。

くみ子「アンタもいつ病気になるか分からん。不健康な生活やし。近くにボクシングジム

ができたから、昔みたいにやってみたら？」

雅二「（真剣に）あんな」

くみ子「改まって、どないしたん？」

雅二「欲しいもんあるか？」

くみ子「欲しいもん？」

雅二「ああ、退院したらプレゼントしたる。

犬でもいいぞ。飼いたい言うてたな？

なるべく小型のほうがええけど」

箸を置いて、考えこむくみ子。

雅二「すぐに答えを出さんでも。ま、考えとけ」

くみ子「ホンマに何でもいい？」

雅二「常識の範囲で」

くみ子「子供」

雅二「はあ？」

くみ子「子供がほしい」

雅二「冗談ばかり言う」

くみ子「(ささぎり) 本気。前のダンナの子  
やけど、ずっと考えててん」

驚いた雅二、手元のコップを倒す。

くみ子「反対されても、絶対にする。ウチ、  
引き取る決心ついたわ」

雅二「え……」

コロッケをバクバク食べるくみ子。

雅二は完全に固まっている。

## ○ メインタイトル 『大仏と小鹿』

### ○ 谷家・DK

全面フローリングの部屋。

段差がなくバリアフリーになっている。

そこでサッカーのテレビゲームをしてい  
る雅二と谷茂(60)。

大差で谷が勝っている。

谷 「てことは、あれか。元ダンナとも血が  
繋がってないんやな」

雅二「ああ、連れ子。奥さんが死んでからは、  
ひとりで面倒見てたって」

谷 「そのダンナも一年後に亡くなったか」

雅二「トラックを運転してて突然死。被害者  
が出なかったのが不幸中の幸い」

谷 「そんなトコの子供を引き取ろうなんて、  
くみ子さんはガンでおかしなつたんか」

雅二「前々から考えてたみたいや」

谷 「へえ、ごっつい根性のオンナやで」  
雅二「非常識なだけ」

谷 「一緒に暮らすて言うても、お前が世話  
するわけやないやろ？」

雅二「まあ、アイツが」

谷 「家の中も明るくなつて、ええやんけ」  
雅二「適当に言うな」

谷 「そら、テキトーやで。よその家の悩み  
を真剣に考えてどないすんねん。で、その  
子は何歳や？」

雅二「五年生の女の子」

谷 「わちや、思春期やがな」

雅二「大変か？」

谷 「一番面倒なときや。やめとけ。時期が悪すぎる」

雅二「時期？」

谷 「犬でも大きくなってからやと、なつかんやろ。あれと一緒や」

雅二「まだ本決まりやない。向こうが嫌がる場合もある。しかし、子育ては難しいか？」

谷 「うちは上の子が病気ばかりで、えらい手えかかった。反抗期もえげつなかった」

雅二「苦労したんやなあ」

谷 「でも、下の女の子はまったく病気もせんとすくすく育った。性格も素直やし。兄妹でこれだけちやう」

雅二「ほう」

谷 「難しいかどうか、その子次第やで」

雅二「さすが経験者。説得力ある」

隣の部屋から声が聞こえてくる。

伝次郎の声「あー、あー」

谷 「はいはい」

とゲームを止めて、部屋を出ていく。すぐに谷伝次郎（90）の両手を引いて戻ってくる。

伝次郎「おお、ダイちゃんやないか」

雅二「お邪魔してます」

伝次郎「陰気臭い顔しとんのお。（小指を立て）こつちにフラれたか？」

谷 「しょうもないこと喋らんと小便いくで」  
谷と伝次郎が便所に行く。

雅二は携帯電話をチェックする。

新着メールが来ている。

『そうめんつゆ買ってきて』と書いてある。

二人がトイレから帰ってくる。

伝次郎「（急に立ち止まり）あー」

谷 「なんや？」

伝次郎「ババ出る」

谷 「一回で済ませろや」

とまた便所に戻る。

雅二、思わず笑ってしまう。



○ 大木家・居間

くみ子が台所で、そうめんを湯がいている。

額から汗が流れている。

そこに雅二が帰ってきた。手にはそうめんつゆを持っている。

くみ子「(それを見て) サンキョ。助かるわ」

雅二「ええぞ」

くみ子「何が？」

雅二「子供」

くみ子「マジで？」

雅二「ああ」

くみ子「ホンマのホンマ？」

雅二「ホンマのホンマ」

くみ子「良かった。テンション上がるわ」

雅二「そんなにうれしいか？」

くみ子「もちろんやん。前のダンナの葬式行ったときな」

雅二「去年の？」

くみ子「(うなずき) そこで初めて見てん。

というか、子供おるのを知った」

雅二「女の子？」

くみ子「うん。目がクリクリとして、奈良公園の子鹿、思い出したわ」

○ (くみ子の回想) 葬儀場・場内

小さな祭壇、椅子の数も少ない。

親族席に女の子が座っている。当時10歳の亜美だ。

大きな目を開き、背筋を伸ばし、前を見つめている。

ガラの悪い参列者の中で、凜として目立っている亜美。

後方の席から、その様子をくみ子が観察している。

○ 大木家・居間

くみ子がコンロの火を止め、そうめんを氷で冷やしだす。

雅二は席に座って待っている。

雅二「今は施設におるんか？」

くみ子「親戚の家をたらい回しにされてからな。ツラかったやろうなあ」

雅二「詳しいな」

くみ子「そりゃ、何回も会いに行ってるもん」

雅二「初めて聞いた」

くみ子「二か月に一回、同窓会ないで」

雅二「嘘ついたんか？」

くみ子「逆に、嘘つかへんオンナおるん？」

雅二「……だがな」

くみ子「(さへぎり) できたできた」

とテーブルにそうめんを置き、食べる用意を始める。

雅二、部屋の隅に置いてあるポストンバックと着替えの入った紙袋を見つける。

雅二「明日から入院か」

くみ子「朝も言うたやん」

雅二「……」

くみ子「亜美ちゃんて、名前やねん」

雅二「北野亜美」

くみ子「元ダンナの名前、よう覚えてたな」

雅二「嫌でも忘れられん」

くみ子「今11歳やから、大学卒業まで面倒見たとして10年ちよつと。その頃、ウチら70歳や。それからが余生やと思ってる」

雅二「そこまで考えてたんか」

くみ子「だって、60歳で老後は早すぎるわ」

雅二「まあな」

くみ子「さっ、食べるよー。いっただきまーす」

ズルズル豪快な音を立て食べるくみ子。

その様子を雅二は眺めている。

くみ子「お腹減ってないん？」

雅二「減ってる」

と食べ始める。

しかしあまり箸が進まない。

### ○ 飛鳥総合病院・駐車場

車が一台やってくる。

停まると、雅二と谷が降りてくる。

○ 同・病室

個室部屋、くみ子がベッドでノートパソコンを触っている。

ドアが開き、雅二と谷が入ってくる。

くみ子「えらい早いね」

谷「一秒でも早く会いたかったんや」

くみ子「また上手いこと言うて」

谷「元気そうやな」

くみ子「もうすぐ退院やって」

谷「痛かった？」

くみ子「全っ然。手術の跡もほとんど分からんし。内視鏡手術って凄いわ」

谷「ちよつと見せてーや」

くみ子「ええで」

と胸を見せようとする。

雅二「おい」

くみ子「ツッコむの早いわ」

谷「ギリギリまで引つ張らんかいな」

雅二「いらんこと言わんと行くぞ」

くみ子「そうか、今日はあの日か」

谷「(うなずき) くみ子さん、また来るわ」

くみ子「ジイちゃんで大変やろ。もう、ええよ」

谷「お言葉に甘えて、そうさせてもらう」

雅二「じゃあな」

くみ子「うん、気いつけてな」

二人が手をあげ、病室から出ていく。

くみ子は、またノートパソコンを開けてネットを始める。

○ 高速道路

雅二の車が走っている。

○ 走る車・車内

雅二が運転している。

助手席にはボーっと外を眺める谷がいる。

谷「そうや、預かる子のオカンはいくつで死んだ？」

雅二「40ちよつと」

谷「若いのに。どこが悪かってん？」

雅二が頭を指さす。

谷 「あちゃー。めちゃくちゃかわいそうやがな。精神の病は周りも分からんから、一番ツライねんで」

雅二「覚せい剤中毒で、狂って自殺したんや」

谷 「ただのクソ女やがな」

### ○ 雅二のアパート・表

大阪市内にある木造モルタル二階建ての学生アパート。

密集した住宅地にある。

アパートの近くに車を止め、ゴミや雑草などを抜いている雅二と谷。

二人とも首にタオルを巻き、汗を拭きながら作業している。

谷 「(部屋を指さしながら) 七、八、九、十」

雅二「何を数えてるねん？」

谷 「部屋数や。そら、60なっつてすぐ会社を辞めるはずやで」

雅二「上司との折り合いが悪かったからな」

谷 「誰でもそうや。でも喰うていくために、再雇用してもらて、年金出るまで食いつなぐねん」

雅二「お前も辞めたがな」

谷 「ワシは介護で、仕方なくや。今風に言うたら介護離職したんや」

雅二「日本中で似たの仰山おるやろな」

谷 「今は、親父の貯金食いつぶして生活しとる」

雅二「……」

谷 「お前は兄貴が残してくれた、この学生専門アパート10部屋から5万ずつで50万や。うらやましい限りやで」

雅二「経費で色々引かれて、利益は20万無い」

谷 「そんなに減るか」

雅二「儲かってるなら、こんな汗かく仕事してない」

谷 「そら、そうや」

雅二「世の中は甘くない。夫婦だけやから、

何とかなってるねん」

谷 「これから大変でんな」

掃除をやめる雅二。

雅二 「そろそろ終了しよか」

谷 「その言葉、待ってたで」

雅二 「いつも手伝ってくれて、ありがとう。」

ホンマ助かるわ」

谷 「ドライブはええ気分転換なるし、晩飯もおごって貰えるからな」

そこへアパート住民の男子学生が帰ってくる。

学生 「おじさんたち、月一回の掃除じゃなくて、週一は来て。こちら辺、すぐ汚くなるんだよ」

雅二たち、頭を下げる。

学生は部屋に入っていく。

谷 「(部屋に向かい) 自分でやれ、このスネカジリ」

雅二 「アホ、聞こえるやろ」

### ○ 大木家・表

澄んだ青空。

くみ子が出てきて、車に乗り込む。

そして走り去る。

### ○ 同・居間

午前中のワイドショーを見ている雅二。

落ち着かなくて、次々チャンネルを変える。

テレビを消し、「あー」と背伸びをする。

### ○ 走る車・車内

田舎道を走っている。

運転しているくみ子、少し緊張した表情だ。

### ○ 路地

住宅街を雅二が自転車ですべて行く。  
強張った顔をしている。

○ 谷家・表

谷が伝次郎を車に乗せようとしている。  
それを自転車にまたがったまま、見ている雅二。

谷 「朝から微熱が出てな。肺炎にでもなつたらかなわんやろ」

雅二「……」

伝次郎 「奥さん、退院したらしいな。良かった良かった」

雅二 「ありがとうございます」

伝次郎 「ご両親はお元気か？」

谷 「両方死んだ、ここらで残ってるのオトンだけや」

伝次郎 「ワイは百まで生きる！」

谷 「そんな不吉なこと言いな。病院行くから、早く乗って」

伝次郎 「やいやい、うるさい」

伝次郎を無理やり乗せ、谷も運転席へ。

そしてクラクションを鳴らし、行ってしまう。

雅二は黙って見送る。

○ 近鉄奈良駅・駅前

人通りが多い。

道路に、くみ子の乗っている車が止まっている。

○ コンビニ・店内

客は雅二だけ。

ずっと雑誌の立ち読みしている。

店員の冷たい視線を感じる雅二。

○ 公園

雅二がベンチで雑誌を読んでいる。

ふと顔をあげると、園内には老人しかない。

サッと立ち上がる雅二、雑誌をゴミ箱に捨てる。

そして自転車に飛び乗り、慌てて出ていく。

○ 止まっている車・車内

くみ子がスマホを触っている。  
助手席の窓に女の子が近づく。顔は見えないが、大きなポストンバックを二つ持っている。

気付いたくみ子、窓を開ける。

くみ子「言うてくれたら、おばちゃんが大阪まで迎えに行っただのに」

首を左右に振る少女。

○ 田んぼ・あぜ道

自転車を止め、木陰で休憩している雅二。陽が傾き始めている。

携帯電話を見ると新着メールあり。

『早く帰ってきて』と書いてある。

ため息を吐きだし、雅二は自転車に乗る。しかしペダルを踏む力は弱い。

家に帰りたくなくて、ゆっくりゆっくり進む。

○ 大木家・居間(夕)

テーブルにご馳走が用意されている。

席に座り、ひとりで待っているくみ子。

テレビでも見ようとリモコンに手をかけた瞬間、誰かが帰ってきた。

○ 同・玄関(夕)

雅二が靴を脱いでいる。

そこにくみ子がやってくる。

くみ子「今日は家におっといてって、あれほど言うたやん」

雅二「(中を指さし) おるか?」

くみ子「アンタを探しに外に行っただわ」

雅二「探しにて、この町を知らんやろ?」

くみ子「でも、見てくるって」

雅二「おかしなヤツやな」

戸が開き、北野亜美(11)が入ってくる。

背が高く、さわやかで、大きな目が印象的な女の子。

亜美「あつ、おじさんですよね」

雅二「……」

亜美「初めまして、北野亜美と申します。よろしくお願いします」

と頭を下げる。

雅二「……」

立ち尽くしてしまふ雅二。

くみ子「アンタも挨拶したら」

雅二「(慚然として) よろしく……」

と中に入る。

くみ子「(笑って) ホント不器用な人やわ。

ごめんね」

亜美も、ほほえんでいる。

### ○ 同・居間(夜)

雅二、くみ子、亜美が晚ご飯を食べている。

くみ子「(笑いながら) それから、どうしたん？」

亜美「ズボンの破れたところを手で隠して家

まで帰ったの。こんな感じで」

と股間に手をあてて、歩きます。

それを見て爆笑するくみ子。

雅二は黙々と料理を食べている。

くみ子「亜美ちゃんはホンマにおもしろい子やわ」

席に戻る亜美。

亜美「おじさんはボクシングをしてたと、聞いたんですが」

雅二「少しな」

くみ子「何が少しやの。学生時代、ずっとやってたやん。何回も優勝してたし」

亜美「すごい」

くみ子「そうやで。こう見えて、すごいねん」

雅二が少し照れる。

亜美「世界チャンピオンと試合したことあります？」

雅二「アマだけで引退した」

亜美「強かったのに、もったいないですね」

雅二「……」

亜美「何で辞めたんですか？」



雅二「聞きすぎや」

シンとなる室内。

くみ子「それくらい答えてあげてもええやんか」

急に立ち上がる雅二。

くみ子「どうしたん？」

雅二「シヨンベン」

と去っていく。

くみ子「トイレって言い。ホンマ、上品なおっさんやわ」

雅二の後姿をチラッと見る亜美。

### ○ 同・亜美の部屋（夜）

物置が亜美の部屋になっている。

古い勉強机とタンスが一つだけの室内。

そこで亜美が荷解きをしている。

教科書を教科ごとに分け、服もきれいに畳んだりと几帳面な性格が出ている。

すると荷物の奥から、亡くなった両親の写真が出てくる。

亜美「……」

すぐ引き出しに直す。

そして立ち上がり、窓を開ける。

家より田んぼのほうが多い田舎の風景だ。遠くで車のライトが光っている。

### ○ 同・寝室（夜）

布団が二つ並んで敷いてある。

雅二は布団の中で本を読み、くみ子はノ

ートPCを触っている。

くみ子「いい子でしょ？」

雅二「……」

くみ子「親があんなんやから、苦労も多かったのに」

雅二「……」

くみ子「礼儀正しいし、性格も曲がってへん」

雅二「……」

くみ子「アンタ！」

雅二「なんや？」

くみ子「返事くらい……」

途中で喋るのをやめる。

雅二「どないした？」

くみ子「不整脈やわ」

雅二「調子乗って、はしゃぐからや」

くみ子「別にええやんか」

雅二「病み上がりやし、歳も考えろ」

くみ子「アンタが興奮させたんや」

雅二「もう寝るぞ」

と布団にもぐる。

くみ子「勝手やわ」

照明を落とすくみ子。

### ○ 同・亜美の部屋（夜）

荷物は全て片づけられている。

布団もピシッと敷かれ、そこで眠る亜美も気をつけをして微動だにしない。

寢息さえ聞こえない。

### ○ 大木家・表

晴れた朝。

家からランドセルを背負った亜美とくみ子が出てくる。

亜美は上品な編み込みヘアで、服装もオシャレだ。

くみ子「ウチもついていくって先生に言うてんで」

亜美「ひとりで大丈夫です」

くみ子「でも」

亜美「五年生が転校初日に、保護者と一緒なんてバカにされちゃいますよ」

くみ子「そうなん？」

亜美「はい。行つてきます」

くみ子「（不安げに）ホンマにええの？」

うなずく亜美、くるりと背を向けて元気に歩いていく。

くみ子が心配そうに見ていると、玄関から雅二も出てきた。

くみ子「アンタもお出掛け？」

雅二「ああ」

くみ子「どこに？」

雅二「行くところ、ひとつしかない」

くみ子「ゲームばかりせんと、たまには外で遊びや」

雅二「子供か」

くみ子「子供より面倒やわ」

雅二は返事をせず、自転車にヒョイと乗り行ってしまう。

くみ子はドアをピシヤッと閉めて、家に戻る。

## ○ 谷家・DK

雅二と谷がテレビゲームをしている。

谷 「ホンマもんの保護者になったんかいな。

ようやるわ。考えられへんアホ夫婦やで」

雅二「お前も賛成したから、承諾してんぞ」

谷 「結婚して何年や？」

雅二「40でしたから、ちょうど20年」

谷 「うちの嫁がお前らの仲を取り持ったん

や。バツイチのくみさんとモテへんダイ

ちゃんを」

雅二「そうや、奥さんは元気にしてるか？」

谷 「昨日の夜、大阪から戻ってきてたけど、

とんぼ返りや」

雅二「お互い親の介護やから仕方ない」

谷 「ホンマやで。こんな形で別居なんて考

えもせんかった。もうすぐ三年や」

雅二「そんなに経つか」

谷 「しかしオンナの本能やな」

雅二「何の話や？」

谷 「一度は子供を育てたいって気持ちけど

つかにあるんや」

雅二「アイツのことか」

谷 「ガンになって死と初めて向き合って、

くみさんも色々考えたはず」

雅二「……急にそんなん考えられてもなあ」

谷 「元ダンナの葬式行つてから、ずっと思

案してたんやろ？」

雅二「何度か会いには行つてたらしい」

谷 「こうなったら、跡取りできたと思つて

精いっぱい気張らんかい」

雅二「養子にしたわけやないで」

谷 「何年も他人のままにしとく気か？ そのほうがおかしいで」

雅二「……」

サッカーゲームが終わる。今日も谷のボロ勝ち。

雅二「テレビゲームくらい手加減してくれや」

谷 「会社勤めでイヤほど、接待してきてん。幼馴染にしてどないするねん。カネでもくれるか？」

雅二「そうやけど」

いつの間にか、二人の後ろに伝次郎が立っていた。

雅二・谷 「同時に気付き」 うわっ！」

伝次郎 「幸さんはどこや？」

谷 「実家に帰ってる」

伝次郎 「逃げられたか」

谷 「そうやそうや」

伝次郎 「孫はどないしとる？」

谷 「二人とも東京」

伝次郎 「ワイ、家族でお前が一番嫌い」

谷 「大事な一人息子でっせ」

伝次郎 「だから余計にや」

雅二、伝次郎が漏らしていることに気づく。

雅二「(伝次郎の股間を指さし) あれ」

谷 「おい、またか。おむつ、させたくなかったけど、もう無理やな」

伝次郎 「はよ死にたい」

谷 「こつちも、毎日願ってるわ」

谷が伝次郎の腕を引っ張り、慌ててトイレに向かう。

二人のあとにはオシッコの道ができてい

る。

部屋の壁には家族写真が飾ってある。谷、伝次郎、奥さんの幸、そして息子と娘が笑顔で映っている。

それをじっと見つめる雅二。

## ○ 大和小学校・表

給食の時間で、騒がしい生徒の声が外まで聞こえている。

○ 同・五年一組

給食を食べる亜美の周りに、クラスメイトがたくさん集まっている。転校初日にして、すっかり人気者になっているのだ。

生徒1「東京住んでたんやったら、スカイツリーに登った？」

生徒2「生でエグザイルとか見たことあるん？」

生徒3「三代目は？ アタシ、めっちゃ好きやねんけど」

好奇心や憧れで、亜美を質問責めにする生徒たち。

担任教師の生駒さくら（26）がそれを注意する。

さくら「みんな食べてからにしないで。ほら、座って座って」

大声で注意しているが、さくらは笑顔だ。

○ 大木家・居間

くみ子が床に座り込み、白い陶器に入ったぬか床を丁寧にかき混ぜている。

そこに亜美がランドセルを左右に揺らし、ご機嫌で帰ってくる。

亜美「たっだいまー」

くみ子「おつかえりー。ごめんね。匂うやろ？」

亜美、くみ子の後ろから覗きこむ。

亜美「お漬物？」

くみ子「そう。代々、このぬか床を受け継いでるねん。うちのお宝やな」

亜美「古そうですね」

くみ子「おばあちゃんの頃やから、百年ぐらい前。明治時代からやわ」

亜美「じゃあ、おじさんは生まれたときからずっと食べてるんだ」

くみ子「あのヒトなんか、手の込んだ料理を

いくら作っても、このキュウリばかり食べるねん」

亜美「そんなに好きなんだ」

くみ子「ホンマに臭くない？」

亜美「私、全然平気だよ」

くみ子「ほんなら、ウチらが死んだあと、これ受け継いでや」

亜美「あと3年くらいですわね」

くみ子「えげつない冗談言うやんか」

亜美「おじさんって、こういうの通じます？」

くみ子「通じる通じる。時々は口喧嘩になる場合もあるけど」

亜美「そのときは私、どっかに避難しますわね」

くみ子「大丈夫、向こうがすぐに逃げるから」

亜美「おばさん、強いんだ」

くみ子「それはちゃう。大喧嘩にならんようにするダンナが偉いねん」

亜美「おじさんに感謝ですわね」

くみ子「もちろんやん。でも、一回も言うたことない」

二人が笑い合う。

かき混ぜるのを止めて、くみ子は手を洗う。

亜美「ぬか漬けて、どうしたらおいしくなるんですか？」

くみ子「教えたから、ランドセル置いて手を洗って来なさい」

亜美「はい」

と階段を駆け上がっていく。

× × ×

雅二とくみ子と亜美が夕食を囲んでいる。

キュウリのお漬物を幸せそうに食べる雅

二。

二人はそれを見て笑う。

雅二「(真顔になり)なんや？」

くみ子「別に。あつ、そうや。学校はどうやった？」

亜美「友達、たくさんできた。クラス全員の名前も覚えちゃった」

くみ子「一日でスゴいわね」

亜美「引っ越しが多いから、特技になったんです」

くみ子「勉強のほうは？」

亜美「向こうで使ってた教科書とほとんど一緒だったから、助かりました」

くみ子「じゃあ、完璧やん」

亜美「そんなことないです」

くみ子「どこが？」

亜美「話し方が冷たいって言われた」

くみ子「標準語だから？」

亜美「たぶん。向こうでは普通だと思っけど」

くみ子「徐々に関西弁に慣れていくしかない

わ。(雅二に) ねえ？」

雅二「喋り方なんか自分の好きなようにしたらええ」

亜美「そうですね」

くみ子「そんな事ないわ。まずは、みんなに

合わすべきや。『郷に入れば』やで。(亜

美に) 意味分かる？」

亜美「なんとなく」

くみ子「周りに合わせるのって、大事やと思

わへん？」

亜美「それもそうですね」

雅二「……」

亜美、二人の表情をうかがっている。

### ○ 同・寝室(夜)

雅二が寝間着に着替えている。

鏡にお腹のポッコリ出た姿が映る。

ファイティングポーズを取る雅二。

そこにくみ子がやってきた。

くみ子「あら、ボクシング始めるん？」

雅二「やるかいな」

布団に入る雅二。

くみ子「やったらええのに」

と鏡台前に座り、化粧水をはたきだす。

くみ子「あの子、だいぶ慣れてきたな」

雅二「……」

くみ子「二人だけのときは喋ったりしてる？」

雅二「……気持ち悪い」

くみ子「珍しいな。胃薬、持ってくるわ」

雅二「ちゃう、あの子」

くみ子「亜美ちゃん？」

雅二「子供のクセに、お世辞言うて顔色ばかりうかがって」

くみ子「アンタとは真逆の人間やねん。愛想良くて、まず相手の気持ちを考えるタイプや。……まあ、確かに要領もいいけど」

雅二「良すぎるねん」

くみ子「大人びてるだけやって」

雅二「あれは大人びたやなくて、大人。見かけが子供なだけ。こっちが見透かされてるみたいで嫌な気分なる」

くみ子「ウチは不憫に思う。あの子はどこに行っても、好かれることを求められてきた」

雅二「……」

くみ子「誰でも傷つきたくないからそうなる。

気持ち悪いとは全然思わへん」

雅二「……子供は子供らしくや」

くみ子「そんなことない。亜美ちゃんは亜美ちゃんらしくでいい」

雅二「勝手にせえ」

と頭から布団をかぶる。

くみ子は、雅二をにらむ。

### ○ 同・亜美の部屋(夜)

戸を開けて、顔だけを外に出し二人の話  
を聞いている亜美。

くみ子の声「楽しい子やで」

雅二の声「お前はダメされてる。あれは演技  
に決まってる」

くみ子の声「別にええやんか、演技でも。逆  
に何が悪いん」

雅二の声「俺は嫌いや。寝る」

くみ子の声「ウチは好きや。寝る」

雅二とくみ子の言い合いが終わり、静か  
になる。

しかし亜美は無表情のまま、じつとその  
場を動かない。



○ 田んぼ・あぜ道

六月だが、真夏のような暑さ。  
下校中の亜美が歩いている。  
額からは玉のような汗が吹き出している。  
その後ろから自転車の雅二がやってくる。  
急ブレーキで止まる。  
亜美が振り返る。

亜美「あっ」

雅二「おお」

一瞬、お互いの動き止まる。

亜美「……後ろ乗っていい？」

雅二「アカン、二人乗りは禁止や」

亜美「ごめん」

雅二「カバンは前カゴに乗せろ」

笑顔でランドセルを入れる亜美。

自転車を降りて、雅二も一緒に歩きだす。

亜美はうれしくてニコニコしている。

雅二はぎこちない表情だ。

○ 大木家・庭

真上から太陽が照っている。

くみ子がしゃがみ込み、ひまわりの札が

刺さった植木鉢に水をあげている。

立ち上がると胸をさする。

くみ子「またドキドキやわ」

休憩しようと家に向かって歩きだすと、

急に心臓を抑えて倒れる。

くみ子「うっ……」

すぐに動かなくなる。

そこへ帰ってくる亜美。

亜美「さつき、おじさんと会って一緒に……」

(周りを見る) あれ、出掛けたのかな？」

居間にいないので、亜美は庭のほうを探

す。倒れているくみ子を発見する。

亜美「おじさん！ おばさんが」

雅二が走ってきて、庭に飛びだす。

そしてくみ子の顔を叩く、しかしまったく

く反応しない。

ポケットから携帯を出して、電話する。

雅二「(電話に) 救急車お願いします。気を

失ってます……はい、奈良市新大宮の  
固まって動けない亜美。

○ 飛鳥総合病院・廊下

手術室の表示板が灯っている。  
黙って座っている雅二と亜美。  
そこに谷が慌ててやってきた。

谷 「(息を切らし)ど、どないや?」

雅二 「分らん」

ハンカチで汗をゴシゴシ拭き、長椅子に  
腰掛ける谷。

谷 「くみ子さん、なんでこんな暑い日に庭  
いじりなんかしたんや?」

雅二 「さあ……」

亜美 「私が夏休みの宿題でヒマワリの観察を  
したいって……」

谷 「……」

雅二 「……」

亜美 「あんなこと言わなければ、おばさんは  
倒れなかった」

雅二 「……」

谷 「……」

沈黙する三人、すると『手術中』の明か  
りが消える。

雅二が立ち上がる。

亜美と谷も立つ。

一同、緊張してドアを見つめる。  
開いた。

○ 葬儀場・場内

大きな祭壇で、沢山の参列者が来ている。  
お坊さんの読経が響く中、喪主席に雅二、  
隣に亜美。

すぐ後ろに谷、伝次郎、幸、そして息子  
と娘の姿もある。

雅二は憔悴した表情。

うつむいたままの亜美。

○ 空

梅雨の曇り空。

○ 大木家・居間

朝食の菓子パンをひとりで食べている亜美。

食べ終わるとランドセルを背負う。

そこへ起きてきた雅二が来る。

寝間着で無精ひげをたくわえている。

亜美「行ってきます」

雅二「……」

無言のまま仏間にいき、ゴロンと寝転ぶ。

亜美は出ていく。

× × ×

仏間で雅二が昼寝をしていると、谷が家に入ってくる。

スーパ―の買い物袋から、冷蔵庫に食材を詰め始める。

終わると仏間に行き、雅二を揺する。

雅二「(起きて)ん?」

谷「食べ物、入れといたから」

雅二「なんぼ?」

谷「カネは今度でええ。親父が心配してるから、顔見せに来い」

雅二「……」

谷「ほなな」

と行ってしまふ。

雅二は寝返りを打つ。すると視線の先にある遺影のくみ子と目が合う。

雅二「……」

もう一度、寝返りをして庭のほうを向く。洗濯物が気持ちよさそうに風で揺れている。

ふて寝する雅二。

× × ×

夕陽が差し込む室内、雅二はまだ眠っている。

亜美が帰ってきた。

雅二、物音で目を覚ます。

亜美「ただいま」

雅二「……」

○ 大木家の近くの道

梅雨の季節だが、朝から晴れている。  
亜美が、プールバックを手に学校へ向かっている。

急に立ち止まり、ぼんやりと空を見上げる。

亜美「……よしっ」

と気合いを入れ、また歩きだす。

### ○ 大和小学校・校庭

水着に着替えた生徒たちがプール授業のために校庭を横断している。

みんな楽しそうに、はしゃいでいる。

### ○ 同・プール

生徒がプールサイドに座り、さくら先生の話を聞いている。

生徒の中に亜美の姿はない。

さくら「水泳の授業はふざけると大変な事故が起こります。今年もケガ人を出さないように注意しましょう。それから……」

さくらが一点を見つめ、固まってしまう。

生徒たちもそちらを見る。

亜美がやってきたのだ。

静まり返る一同。

亜美の肌には傷あと、タバコの火傷あとがたくさんある。

プールサイドに座る亜美。

生徒たち、ざわざわ騒ぎだす。

しかし亜美はまったく動じず、落ち着いている。

さくら「(困惑して)……」

### ○ 大木家・居間

昼下がり。

テレビを見ながら、寝そべってビールを飲んでいる雅二。

電話が鳴る。

無視していると切れる。

だが、また鳴る。

しつこく鳴り続ける。

雅二「誰やねん」

と面倒そうに電話のところに行き、取る。

雅二「(電話に) はい……そうです……えっ、

はい……はい……」

真剣な表情に変わっていく雅二。

### ○ 大和小学校・廊下

放課後で人気もなく、閑散としている。

そこを雅二が早歩きで進む。

スーツにネクタイ姿で、額にはじっとり

汗をかいている。

五年一組の教室を見つけ、止まる。

雅二「……」

深呼吸をして、ドアを開ける。

雅二「失礼します」

と中に入っていく。

### ○ 同・五年一組

雅二とさくらが向かい合って座っている。

さくら「すみません、お忙しいところ」

雅二「いや、大丈夫です」

さくら「あの……亜美ちゃんは転校生として

百点でした。今日まで本当に上手く行っ

ました」

雅二「今日まで、ですか」

さくら「勘違いされると困るのですが、私は

やめろとは言いません。むしろ亜美ちゃん

は偉いな、強いなと思うんです」

雅二「ええ」

さくら「でも子供って、大人より残酷で何で

もいじめの原因になります。それでなくて

も、彼女は訳ありですから」

雅二「訳あり……」

さくら「あつ、決してそういう意味では」

雅二「了解してます」

さくら「ありがとうございます」

雅二「しかし本人に何と言ってええんか」

さくら「ですよね。あの、亜美ちゃんは家で

はどんな感じですか？」

雅二「うーん、普通です」

さくら「大木さんとは、ご親戚の関係ですよ  
ね？」

雅二「遠いですけど」

さくら「小さい頃から、ご存じなんですか？」

雅二「まあ……そうやな」

さくら「どっちですか？」

雅二「知らん」

さくら「知らん？」

雅二「ああ、まったくや。一か月前に初めて  
会った」

さくら「(絶句) え……てっきり以前からの

関係だと思ってました」

雅二「全然」

さくら「そうですか、困りました……」

お互いが黙り込んでしまう。

## ○ 同・校庭

雅二がネクタイを緩めながら歩いている  
と、校門から亜美が飛び出す。

亜美「ごめん」

雅二「びっくりしたわ」

亜美「ごめんなさい」

雅二「何が？」

亜美「先生に呼び出されたんでしょ。迷惑か  
けてしまつて」

と頭を下げる。

雅二「別に悪いことはやってないやろ」

亜美「そうだけど」

雅二「謝る必要はない」

と学校を出ていく。

あとを追う亜美。

## ○ 田んぼ・あぜ道

無言で歩く雅二と亜美。

亜美が突然、服をめくりあげて傷あとだ  
らけのお腹を見せる。

足が止まる雅二。

雅二「……」

亜美「痛くも、かゆくもないんだけどね」

雅二「服直せ」

服装を元に戻す亜美。

雅二「アイツの元ダンナにやられたんか？」

亜美「お父さんのこと？」

雅二「ああ」

亜美「違う。あのヒトは長距離トラックだったから、あまり家にいなかった。でも、お金は毎月くれたから感謝してる」

雅二「なら……」

亜美「やったのはお母さん」

雅二「血が繋がってるほうが愛情無いか」

亜美「そうだね。でも、優しいところもあったんだよ」

雅二「優しいのに、するんか？」

亜美「私が失敗ばかりするから、虐待されるの。覚せい剤も」

雅二「(やえぎり) お前もやってたんか？」

亜美「しろって言われたけど、それだけは絶対しなかった」

雅二「……」

亜美「だから、タバコの火を」

雅二「その話は、もういい」

亜美「うん」

二人、黙って歩きだす。

雅二「先生がプール休んでもええって、言うてはったぞ」

亜美「いいよ、泳ぐの好きだもん」

雅二「お前がよくても、他が困るんや」

亜美「最初は気にしてても、時間が経ったら何も言わなくなるの。だから、隠すと逆にいじめられる」

雅二「しかしなあ……」

亜美「同情されると楽なの。犬がお腹向けると攻撃されないのと一緒だよ」

雅二「家庭環境が複雑なんも、みんなに言うてるらしいな」

亜美「みんな、凄く心配してくれる」

再び黙って歩く二人。

雅二「……これからどうするねん？」

亜美「プールに入りたい」

雅二「ちやう。身の振り方や」

亜美「身の振り方？」

雅二「俺は面倒をみれん。お前も二人暮らしはしんどいやろ」

亜美「……」

雅二「施設に戻るんか、親戚のどこに行くか」

亜美「……うん」

雅二「一学期終わるまでに考え」

亜美「おじさんはどうしたいの？」

雅二「俺は……好きにさせてもらう」

亜美「だよね」

雅二、突然止まる。

雅二「ちよつと寄るところあるから、先に帰つとけ」

亜美「分かった」

別々の方向に去っていく二人。

## ○ 谷家・DK(夕)

雅二と谷がテレビゲームをしている。

谷が突然ゲームを消す。

谷「甘えたこと抜かすな。誰かて、いつかは大事なヒトが死ぬねん。そのたびに引越りするんか」

雅二「あそこにおると嫌でも、アイツを思いだしてしまふ」

谷「あの家売って、どないする気や？」

雅二「学生アパートに住もうと」

谷「亜美ちゃんは？」

雅二「そら、別々になる」

谷「ええかげんにさらせ。あの子は人間や。犬や猫でも飼ったり捨てたり、簡単にせえへんわ」

雅二「……」

谷「何の覚悟もせんと一緒に暮らしだしたんか？ お前を見損なつたで」

雅二「あの子は、しっかりしてる」

谷「しっかりしてても、子供は子供や。大人が事情を読み取つたらんかい」

雅二「(うつむいて)……」

谷「亜美ちゃんがどれだけ苦労して生きて来たか、お前はよう知ってるやろ」



雅二が黙り込み、少し間がある。

谷 「二人になってから、家はどんな雰囲気  
やった？」

雅二 「ずっと悪い」

谷 「ギクシヤクか？」

雅二 がうなづく。

谷 「くみさんはガンになる前から色々  
考えてたんやと思うで。あの子との同居も  
意味があつたはずや」

雅二 「意味？」

谷 「お前はアホみたいに丈夫。でも、くみ  
子さんは病弱や。先に亡くなるのを見越し  
たんちやうか」

雅二 「俺ひとりにはできんと思つてたんか？」

谷 「そこは自分で考え。とりあえず、引つ  
越しなんてアホなこと言わんと遺品整理で  
むしろ。どうせ、してないやろ」

雅二 「ああ、後回しになつてる」

谷 「まずはそれからや」

雅二 「……」

そこに伝次郎がやってくる。

伝次郎 「心の整理もできるさかいな」

谷 「ええこと言うがな。でも、ズボンのス  
ソからウンコこぼれてまつせ」

谷はぞうきんを持ってきて、床を拭き始  
める。

谷 「ダイちゃんはサッカーゲームと一緒に、  
生き方も下手すぎる」

雅二 「サッカーは関係ない」

谷 「ある」

雅二 「どこが？」

谷 「いつも正面突破ばっかり狙う。時間か  
けてボール回したり、サイドから攻めたり  
せな。人生も一緒、工夫が必要なんや」

雅二 「工夫か……」

谷 「生き方を少し変えてみるちゆうことや」  
雅二 「(思案顔で) ……」

### ○ 大木家・表(夜)

雅二が帰ってきた。

家が真っ暗だ。  
雅二「あれ？」  
とカギを開ける。

○ 同・居間（夜）  
部屋に明かりがつく。  
周りを見る雅二、亜美はいない。  
雅二「もう寝たんか？」

○ 同・亜美の部屋（夜）  
薄暗い室内。  
ドアが開き、雅二が部屋を見渡す。  
しかし亜美の姿はない。

○ 路地（夜）  
雅二が自転車に乗りながら、電話をしている。  
雅二「（電話に）そっちに来たら連絡して。  
ああ、先生にはもう電話した……頼むわ」と切る。  
遠くで救急車のサイレンが聞こえる。  
心配になった雅二の自転車のスピードが上がる。

○ 国道（夜）  
雅二がキョロキョロ周りを見ながら、自転車に乗っている。  
すると前方から亜美が歩いてくる。  
必死に漕いで近づく雅二、ハアハアと息が荒い。  
亜美はキョトンとした顔をしている。  
亜美「おじさん、どうかしたの？」  
雅二「お前を探してたんや。こんな時間まで何しててん」  
亜美「LINE送ったけど」  
雅二「ライン？」  
亜美「携帯のメールみたいの。おばさんと一緒にアプリ入れたじゃない」  
雅二「あつ、あれか」  
と携帯電話を出す。

待ち受け画面のアプリに通知マークがある。

亜美「(指をさし) ほら、これ」

雅二「ホンマや……そんなことより、どこ行つてたんや？」

亜美「水着を探しに」

雅二「学校の無くしたんか？」

亜美「(首を横にふり) 全身隠れるようなのを買おうと思つて」

雅二「……」

亜美「色んなスーパー探したけどなかった。

東京だったら、すぐ見つかるんだけど奈良にはないみたい」

と笑つて答える。

雅二「……もう、遅いから帰るぞ」

亜美が歩き出す。

雅二「おい」

亜美「(振り返り) なに？」

雅二「後ろ乗れ」

亜美「禁止じゃないの？」

雅二「早く」

亜美が荷台に乗る。

雅二が漕ぎ出す。

二人乗り自転車が暗い道を走っていく。

### ○ 大木家・表(夜)

満月がポツカリ浮かんでいる。

家の中から、ガタガタと音が聞こえてくる。

### ○ 同・寝室(夜)

寝ていた雅二が目を覚ます。

物音がしている。

雅二「ん？」

### ○ 同・居間(夜)

月明りだけで、薄暗い。

雅二がゆっくり入ってくる。

電気をつけるが誰もいない。

音も聞こえない。

雅二「……」

気のせいかと照明を消そうとしたとき、  
仏間で人影が動いた。

雅二が覗くと亜美が背中を向けて、座つ  
ている。

雅二「(驚き) お前、何してる?」

亜美「別に」

と振り返るが、後ろに何かを隠した。

雅二「今のなんや?」

亜美「いや、なにも」

雅二「正直に出せ。今なら許したる」

亜美「そんなんじゃないって」

雅二「財布からカネでも抜いたんやろ」

亜美「違うよ」

雅二「みんな一度は通る道や」

亜美「ホントに違うって」

雅二「なら見せれるやろ」

と引っ張る。

負けずに頑張る亜美。

雅二「貸せ!」

亜美「イヤだ!」

雅二「お前のそういうコソコソしてるところが  
嫌いやねん」

と大人の力で引っ張る。

亜美の後ろに隠していた白い陶器がゴロ  
ンと倒れた。

そして床にぬかがこぼれる。

雅二「……」

亜美「だからヤだつて言ったのに」  
と行こうとする。

雅二「待て」

亜美の腕をつかむ雅二。

亜美「離せ!」

手を払いのけ、階段を駆けあがっていく。

雅二はこぼれたぬかを見つめる。

### ○ 同・亜美の部屋(夜)

亜美が布団に潜っている。

戸が開き、雅二が入ってくる。

雅二「なんで隠した」

亜美「……」

雅二「俺が見たら、アイツを思い出すと気が遣ったんか？」

亜美「……」

雅二「くみ子にぬか床を頼まれてたか？」

亜美「……大事なモノだから腐らせないでつて言われてた」

雅二「食べさせろ」

亜美「え？」

雅二「腹減ったから、俺に食べさせてくれ」

亜美「今？」

雅二がうなづく。

### ○ 同・居間(夜)

雅二と亜美が台所に並んで立っている。

亜美が流しでキュウリを洗う。

すると雅二が奪い取り、食らいつく。

バリバリと音がする。

雅二「うまい。お前も食え」

と半分に分けて折って差し出す。

亜美もかぶりつく。

雅二「どや？」

亜美「ヤバイ」

雅二「そやろ」

食べ続ける二人。

漬物を噛みしめる音だけが聞こえる。

雅二「やっぱり最高や」

亜美「(下手な関西弁で) めちゃくちゃおいしいで」

雅二「めちゃくちゃ下手クソやな」

亜美が笑う。

雅二も笑う。

亜美「ぬか臭いね」

雅二「いくら好きでも、夏はキツイわ」

亜美「……」

雅二「……」

キュウリをバリバリ食べながら、二人の目からは涙が溢れている。

遺影のくみ子は優しい笑みを浮かべている。

○ 大木家・全景(夜)

この家だけ明かりが灯っている。

○ 空

梅雨が明けて、入道雲がモクモク湧いている。

○ 大木家・表

洋服ダンスや収納ケースなどが表に出されている。

それに『不用品』と書かれた紙を貼っている亜美。

雅二、家から大きな木彫りのクマを持ってくる。

雅二「これも頼む」

亜美「はい」

と受け取る。

雅二はまた中に戻る。

○ 同・居間

亜美が食い入るようにパソコン画面を見つめている。

雅二が顔や腕の汗をタオルで拭きながら来て、隣りに座る。

雅二「全部終わった」

亜美「お疲れさま」

雅二「それ、俺も触ったけど暗証番号分からんから無理やろ」

亜美「パスワードいけたよ」

雅二「誕生日も携帯の番号もちょうかつたで」

亜美「0935だった」

雅二「そこまで聞いてたんか」

亜美、首を横に振る。

雅二「じゃあ、なんで分かかってん？」

亜美「くみ子で935かなって」

雅二「ほう。お前、勘ええわ」

亜美「おじさんって、ホントにボクシング凄かったんだね」

雅二「いきなりなんや？」

亜美「これ」

とパソコン画面を雅二に見せる。  
そこには古いスポーツ新聞の記事がある。  
『大木雅二 五輪へ』、横に写真まで載  
つてある。

雅二「懐かしいなあ」

亜美「おばさん、こんな画像ばかり保存し  
てるの」

雅二「アイツ、俺の現役時代を知らんからな」

亜美「オリンピックの結果はどうだったの？」

雅二「行ってないんや」

亜美「え、だって『五輪へ』って書いてある  
けど」

雅二「モスクワオリンピック、日本はボイコ  
ットしたんや」

亜美「ボイコット？」

雅二「参加せんかった。アメリカとか、あと  
何か国も」

亜美「どうして？」

雅二「話したら長くなるけど。まあ、そうい  
う時代やってん」

亜美「もしかして、それで引退したの？」

雅二「まあな」

亜美「そりゃ、一生懸命やってたのに急にダ  
メになったらね」

雅二「パソコン、他になんかあったか？」

亜美「別に」

雅二「じゃ、それも処分やな」

亜美「ちよつと待って。最後におばさんが見  
てたのが、近所のボクシングジムのホーム  
ページだったの」

雅二「そういえば言うてたな。アンタも、た  
まにはカラダ動かしてやって」

亜美「おじさんのボクシングする姿を見たか  
ったんじゃないかな」

雅二「さあ、どうやら」

亜美「シニアの会員募集してるよ」

雅二「日本一になったオトコが今さら、ジジ  
ババと一緒に練習なんかできへん」

とパソコンを持って行こうとする。

亜美「待って。捨てるなら、ちょうだい」

雅二「こんな古いのやめとき。新しいの買うから」

亜美「これがいい」

雅二「遠慮せんで」

亜美「(さへぎり) おばさんが使ってたヤツがいいの」

雅二「……そうか」

亜美「うん」

雅二がノートPCを渡す。

大事そうに受け取る亜美。

### ○ 大和小学校・表

水泳の授業をする生徒の声が聞こえてくる。

柵の隙間からプールを覗く男性の姿がある。雅二だ。

自転車を止めて、じつと見ている。

生徒の中に亜美もいる。

ずっと覗いていると、いつの間にか隣に

さくらが立っていた。

雅二「(驚いて) 先生!」

さくら「クラスのみんなも慣れたみたいですよ」

雅二「色々ご迷惑おかけました」

と頭を下げる。

さくら「いえいえ、今回は亜美ちゃんに学ばせてもらいました。真正面から、困難に挑

める子もいるんだなって」

雅二「あの」

さくら「なんででしょう?」

雅二「(プールを指さし) 生徒だけで、大丈夫ですか?」

さくら「副担任の男性教師もいますので」

チャイムが鳴る。

さくら「じゃ、そろそろ戻ります」

と笑顔で去っていく。

雅二がまたプールを覗く。

その表情は穏やかだ。

### ○ 国道

大型トラックがスピードを上げて駆け抜



けていく。

雅二は自転車で歩道を走っている。

時々、ポケットからプリントアウトした地図を出して見ている。

急ブレーキをかけて止まる。

目の前に『エンジョイジム』というボクシングジムある。

『女性・初心者も大歓迎』の文字。

ポップなデザインの建物で、周りの風景と合っていない。

### ○ エンジョイジム・練習場

中央にリングがあり、周囲は鏡張り。

各所にサンドバックなどトレーニング機器が揃っている。

照明も明るく、プロボクサー向きでは無さそうだ。

そこにひとりで縄跳びをしている丸山健(44)。

ぽっちゃり体型で、人懐っこい顔をしている。

雅二が入ってきた。

丸山「見学ですか？」

雅二は口を開かず、ジムをゆっくり一周する。

懐かしそうにトレーニング道具を眺めている。

丸山「中高年で習ってる方も多いですよ。女性は大イェット、男性は体力強化の方が多いですね」

雅二「……」

壁に貼られたチラシが目にとまる。

『還暦ファイト』と書いてある。

丸山「それはアマチュアの大会です。アラ還限定の」

雅二「アラカン？」

丸山「60歳前後という意味です。試合の応募は今日までですね」

雅二「俺、これに出る」

丸山「何をおっしゃるんですか。最低でも一

年間はキツチリ練習してもらって」

雅二「(さへぎり) 会長呼んできて」

丸山「はい」

雅二「早く」

丸山「私ですが」

雅二「アンタが？」

丸山「昔はプロボクサーでした」

雅二「どこまで行った？」

丸山「四回戦です」

雅二「(チラシを指さし) これに出場する資格とかあるの？」

丸山「出る条件はジムの承諾だけ。しかしアマと言っても、お客さんからお金をいただくわけですから」

雅二「無様な試合はできんと」

丸山「その通りです」

雅二「ちよつと見てて」

とサンドバックの前に立つ。

丸山「一体、何をしようと」

その瞬間、パンパーンときれいなワンツ―パンチをいれる。

丸山「(啞然として) ……」

### ○ 谷家・居間(夜)

雅二と谷が向かい合って座っている。

谷「アカンアカン、やめとけやめとけ」

雅二「36年ぶりの試合」

とニヤリと笑う。

谷「……いつやるねん？」

雅二が一本指を立てる。

谷「一か月しかないんか」

雅二「一週間」

谷「(首を振り) いくら強かった言うても昔は昔、今は今やぞ」

雅二「分かってる」

谷「それにワシ、元々格闘技は嫌いなんや」

雅二「やったら、おもしろいで。お前も一回くらこ」

谷「(さへぎり) アホ言うな。こんなときに、くみ子さんがおったら一緒に反対して

くれたのに」

雅二「アイツはボクシングとか好きやで」

谷 「お前、新しい嫁はん貰え」

雅二「突然、何や。俺はいらんぞ」

谷 「亜美ちゃんのためにいるんや」

雅二「家事なら手分けしてるで」

谷 「家事以外に女同士しか分かんことも

あるやろ？ ダイちゃんだけでは心配やわ」

雅二「……これからも二人で暮らしていくか、

まだ決めてないねん」

谷 「そうなんか……」

そこに亜美がやってきた。

亜美「こんばんは」

谷 「おお、よう来た」

雅二「何しにきたんや？」

谷 「俺が呼んだ。まあ、上がり」

亜美が雅二の隣に座る。

谷 「(雅二を指さし) こいつ、ボクシング

の試合するて、寝ぼけたこと言うてるねん」

亜美「え、ホントに？ 若いヒトと戦うの？」

雅二「向こうも同じくらいの歳や」

亜美「じゃあ、賛成かな」

谷 「おいおい、殴り合いやぞ。練習もほと

んどせんとやるなんて、ボコボコにされる

に決まってる。死んでまうかもしれんぞ」

雅二「ヘッドギアもつけるし、医者も待機し

てる。ルールもきっちりしてある」

亜美「ちゃんとしたスポーツですね」

谷 「何がスポーツや。60のジジイ同士やぞ。

体はぶよぶよ、足はフラフラ、頭はボケ始

め」

雅二「言い過ぎやで」

谷 「パンチ当たって入れ歯が落ちたらKO

負けか、カツラ飛んで行ったらレフリース

トップか」

亜美「(笑いながら) それウケる」

雅二「俺は後悔したくないんや」

谷 「しよっぱい試合して恥かいたら余計に

後悔するで」

雅二「途中で投げ出したボクシングの後始末

をするんや。今度の試合が、俺のオリンピックやと思っただけや

谷 「カッコつけやがって」

亜美 「私は全力で応援する」

雅二 「ありがとう」

谷 「ワシだけ心配してるのアホらしくなつたわ」

と席を立つ。

亜美 「どうしたの？」

谷 「ションベンや」

トイレに行こうとすると、伝次郎がやってきた。

伝次郎 「シユシユシユ」

とボクサーのマネを始める。

谷 「邪魔！」

怒ったままトイレに行く谷。

雅二と亜美、顔を見合わせ大笑い。

### ○ 大木家・表（早朝）

まだ周りは薄暗い。

スウェット姿の雅二が出てくる。

軽く体操、そして屈伸をして走り出す。

### ○ 大木家の近い道（早朝）

静かな道に、タツタツタツという足音と

ハアハアと激しい息遣いが聞こえてくる。

朝陽を浴び、顔を歪ませて走ってくる雅二。

二。

体が重そうだ。

### ○ 大木家・庭

居間から掃除機をかける音が聞こえてくる。

亜美が学校へ行く前に家事をしている。

掃除を終えると、洗濯物を持って庭に出

てくる。

パンパンと叩いたり、しわを伸ばしたり

と慣れた手つきで干し始める。

### ○ エンジョイジム・練習場

リング上で丸山のミットを打っている雅二。

しかし、すぐにばてる。手数も少なくなり、スピードも急激に遅くなる。

丸山「いくら日本選手権優勝で、オリンピック候補でも還暦ですよ。こんな練習でへばるなら、1ラウンドも持たないです」

カンとゴングが鳴る。

同時に、倒れこむ雅二。

丸山「今なら、試合キャンセルできますけど、どうされますか？」

雅二、寝転んだまま首を左右に振る。

### ○ 食品スーパー・店内

亜美が買い物カートを押している。

メモを見て値段、賞味期限をしっかりと確認しながら商品を入れていく。

### ○ 大木家の近くの道（夕）

夕方の道を歩く亜美、両手には買い物袋を抱えている。

ビニール袋が指に食い込んでいる。

後ろからトレーニング帰りの雅二が走りながらやってきた。

雅二「一個持つわ」

と買い物袋を取ろうとする。

亜美「いいよ、おじさんはロードワークの途中でしょ。家事は全部、私がするから」

雅二「(袋を見て) 今日も手作りか？」

亜美「もしかしてお腹減ってる？ 時間かかりそうだけど」

雅二「明日からは弁当やインスタントでええ」

亜美「カロリーとか栄養とか」

雅二「(さへぎり) 無理は続かん。お前は子供やねんから学業が優先や」

亜美「……分かった」

雅二「よし」

と風を切って走っていく。

笑顔で見送る亜美。

○ 大木家・脱衣所(夜)

雅二が服を脱いでいる。  
鏡に映る自分を見て、軽いシャドーボクシングを始める。  
さすがにキレイなフォームである。  
そして鏡の前でファイティングポーズを取る。

そのとき、急にドアが開く。亜美が立っていた。

亜美「あつ、ごめん」

とすぐに閉める。

ポーズをやめると、お腹はまだ出ている。パチンと腹を叩き、風呂場に入っていく。

○ 同・居間(夜)

台所で料理を作っている亜美。  
一品ずつテーブルに並べていく。  
すべてカロリーの低そうな食べ物だ。  
席に着いた雅二が手を合わす。

雅二「いただきます」

と勢いよく食べだした。

亜美はうれしそうに見ている。

× × ×

亜美、食器を洗っている。

仏間で寝てしまっている雅二。

洗い物が終わった亜美、雅二にタオルケットをかけてやる。

雅二の足や、めくれたTシャツから見える腰には大量の湿布葉が貼ってある。

亜美「……」

○ エンジョイジム・練習場

若い練習生たちに交じり縄跳びをしている雅二。

リズムよく飛んでいる。

× × ×

雅二、サンドバックを叩く。

上下にパンチを打ち分けている。

汗が吹き出す。

× × ×

パンチングボールを打っている雅二。  
ボールが左右にはね、ジム内に音が響い  
ている。

× × × ×  
鏡を見て、雅二がコンビネーションの確  
認している。

後ろから丸山が歩いてくる。

丸山「打ったあとに、左のガードを下げるク  
セがありますね」

雅二「(丸山をにらみ) あー」

丸山「(怖がりながら) いや、その、左ガー  
ドが落ちるとカウンターをもらいやすいか  
と。……釈迦に説法ですかね」

雅二が鏡に向かいコンビネーションをす  
る。

打ち終わると、確かに左ガードが少し下  
がっている。

雅二が丸山の前に立つ。

丸山「(びびって) な、なんですか?」

雅二「他に直すところあったら教えてくれ」

丸山「はあ」

練習に戻る雅二。

丸山が真剣に見ている。

× × × ×  
中学生とスパarringをしている雅二。  
パンチはひらひらとかわされ、めった打  
ちにされている。

雅二はそれでも前が出る。

丸山がリングに上がり、止めに入る。

丸山「死ぬ気ですか?」

雅二「もう1ラウンドする」

丸山「ダメですよ」

雅二「どけ」

と少年にかかっていく。  
だが見事にパンチを食らい、大の字にな  
って倒れる。

丸山が起こしに行く。

丸山「だから、言ったでしょ」

雅二「アイツが一瞬見えた」

丸山「誰ですか?」

雅二「死んだ嫁」

丸山「ちつとも笑えません」

と雅二を立ち上がらせる。

雅二「少し休んだら、続きや」

丸山「絶対にダメです」

フラフラだが、やる気は満々の雅二。

### ○ 同・表

中で練習する雅二の姿が見える。

釘づけになっている亜美。

### ○ 大木家・居間（夕）

焼肉を用意している亜美と谷。

テーブルにはビールやデザートまで置いてある。

伝次郎は勝手に肉を焼いて、食べ始めている。

谷 「今日はアイツの壮行会や。帰って来る

まで我慢できんか」

伝次郎「我慢できるくらいやったら、待つてる」

谷 「ホンマ、減らず口やわ」

伝次郎「お前にも遺伝してるよってな」

笑って聞いている亜美。

そこへ雅二が帰ってくる。

顔中に絆創膏があり、目も腫れて、鼻には脱脂綿が入っている。

三人は雅二の顔を見て、固まる。

雅二「若いのにエライやられてな」

亜美「……」

谷 「……」

伝次郎「……」

雅二「こつちもだいぶ殴ったで」

亜美「……とりあえず食べない？」

谷 「そやな。ま、座れ」

それぞれが「いただきます」と言っ、食べだす。

雅二だけはサラダボウルを食べている。

谷 「それで勘のほうは取り戻せたか？」

雅二「完璧や」



谷 「年取っても、さすがオリンピック選手  
や」

雅二 「でも目はアカンな。視力は落ちたし、

老眼やし、なんだって動体視力がダメや」

亜美 「他は大丈夫なんだね」

雅二 「そやな。あとはスタミナが無いのと、

スピードも遅くなつたな、それに」

伝次郎 「(さえぎり) ボロボロやがな」

全員が笑う。

すると、谷が紙袋を雅二に渡す。

雅二 「なんや？」

谷 「開けてみ」

雅二が袋を破ると、真っ赤なボクシング  
の試合用トランクスが出てくる。

谷 「ワシとオトンからのプレゼントや。そ  
れでここに」

と指をさす。

『大木雅二』と刺繍が入ってる。

谷 「亜美ちゃんがやってくれてん」

亜美 「ミシン使ったら、誰でもできる。先生  
に頼んで、家庭科室でやらせてもらったの」

雅二 「(じつと見つめて) ……」

伝次郎 「何か言うことないんか？」

雅二 「みんな、ありがとう」

と頭を下げる。

伝次郎 「ちやう」

雅二 「ん？」

伝次郎 「勝つて言わんかい」

雅二 「もちろん全試合、KOします」

一同から笑みがこぼれる。

## ○ 同・表(夜)

雅二、そして千鳥足の谷が出てくる。

谷 「ワシ、ひとりで大丈夫や」

眠っている伝次郎を乗せた車いすを亜美  
が押してくる。

雅二 「お前だけなら、ほつとくけど親父さん  
もおるからな」

亜美 「私、コンビニに行くつもりだったし」

谷 「ほな、若モンに送ってもらおうか」

雅二「野菜だけやったけど、ごちそうさんや  
った」

谷 「おお。(亜美を見て) じゃあ、頼むわ」

亜美がうなづく。

谷は後ろ向きになり片手を上げて、帰っ  
ていく。

車いすを押して亜美もついていく。

### ○ 田んぼ・あぜ道(夜)

車いすに手を置き、立ち止まっている亜  
美。

伝次郎はまだ眠っている。

そこにズボンのチャックを上げながら、  
小走りでくる谷。

谷 「すまんすまん。おっちゃん、酒飲んだ  
ら止まらねん」

二人が並んで歩きだす。

亜美「ボクシングの試合、3回勝ったら優勝  
だって」

谷 「たった2分を3ラウンド、てダイちゃ  
んは言うとったけど。一日に3試合は過酷  
やで」

亜美「無理かな？」

谷 「体力次第ちゃうか。出場するジジイ連  
中と技術のレベルは違いすぎる」

亜美「だよね」

谷 「しかし、なんで急にやろうと思ったん  
やろ？ オリンピックがアカンなつてから  
はボクシングと離れて暮らしてきたのに」

亜美「やっぱり、おばさんが死んだからだと  
思う。吹っ切るために」

谷 「亜美ちゃんのためかも知れんで」

亜美「どうして？」

谷 「いや、やっぱり自分のためやな」

亜美「自分？」

谷 「結局はそうなるやろな」

亜美が難しい顔をしている。

谷 「どないした？」

亜美「おじさんが、何考えてるのか分からな  
いんです」

谷 「なんも考えてない」

亜美 「なにも？」

谷 「いや、なんも考えてる」

亜美 「どっちですか？」

谷 「アイツがどう思ってるかなんか、心配するだけ無駄や。60年、一緒におるワシにも分からん」

亜美 「でも……」

谷 「相手を思いやる気持ちさえあれば、それでええんちゃうか。少々の行き違いも必要やで」

亜美 「うん」

谷 「で、決めたんか。自分のことは」

亜美 「自分？」

谷 「これからのことや。施設に戻るか、親戚のトコか、それともここに残るかや」

亜美 「……」

そのとき、伝次郎が目を覚ます。

伝次郎 「(寝ぼけて、周りを見回し) ここは

天国か？」

谷 「地獄や」

伝次郎 「嘘つくな、このバカたれ息子め」

谷 「うるさい、死にぞこない」

亜美、笑う。

### ○ エンジョイジム・練習場

大勢の女性と中高年男性が楽しそうに練習している。

### ○ 同・事務所

ガラス張りの部屋で練習場が見えている。書類にサインしている雅二。

丸山は呆れて見ている。

丸山 「ちゃんと読みましたか？」

雅二 「……」

丸山 「その契約書には大ケガをしても、後遺症が出ても」

雅二 「(ぐえぎり) 分かってる」

丸山 「……」

雅二 「この部屋に優勝トロフィー飾るで」

丸山「私は結果なんてどうでもいいと思つて  
ます。もし大木さんに何かあったら」

雅二「俺は覚悟できてる」

丸山「このジムが潰れちゃうんですよ」

雅二「心配するな」

丸山「しますよ。ローンが25年も残ってるん  
ですから」

雅二「よし！」

と席を立つ。

雅二は戦う顔つきになっている。

丸山が大きなため息を吐きだす。

### ○ 大木家・庭

雅二が首にタオルを巻き付け、椅子に座  
っている。

その後ろに立っている亜美。

手にはバリカンを持っている。

亜美「お客さん、ホントによろしいんですか  
？」

雅二「思いきり行ってくれ」

亜美「減量失敗した？」

雅二「体重はきつちり4キロ落とせた。坊主  
は気合いを入れるためにする」

亜美「緊張するわ」

雅二「焦らさんとやってくれ」

亜美、バリカンの電源を入れる。

亜美「いきます」

雅二「おお」

ウィーンと唸りながら、天パの髪に入っ  
ていく。

額から後ろに進む。

髪の毛はパラパラ落ちて、見事にそり上  
げていく。

1分でほとんど刈ってしまい、電源を切  
る。

雅二「もう済んだか？」

亜美「大体は。細かいところは一回流したあ  
とにする」

雅二「(頭を触り) すっきりしたで」

亜美「あっ！」

雅二「(焦って) 失敗したんか？」  
亜美「違う、あれ」

と地面を指さす。

『ひまわり』と札の刺された植木鉢があり、芽が出ている。

雅二「アイツが植えたやつか」

亜美「うん」

じっと見つめる二人。

亜美「夏休み中には咲くね」

雅二「水やるの忘れるな」

亜美がうなづく。

陽は傾き始め、影が長く伸びている。

### ○ (雅二の夢) ボクシングジム・練習場

大きなジム。

モスクワオリンピック、ボクシング日本代表選手が合同で練習をしている。

その中に36年前の雅二の姿もある。

監督が来て、手招きをする。

監督「練習止めて。全員、事務所に来い」

### ○ (雅二の夢) 同・事務所

監督、コーチ、選手が集まっている。

一番後ろに立っている雅二。

テレビにはニュース速報が流れている。

アナウンサー「只今、JOCがモスクワオリ

ンピック不参加を正式決定しました。もう

一度、お伝えします。JOCがモスクワオ

リンピック不参加を正式決定しました」

監督がテレビを消し、静まり返る室内。

選手1「……今のどういう意味ですか？」

監督「日本はボイコット。出場できんという

ことだ」

選手2「ふざけんよ！」

とグローブを壁に叩きつける。

それぞれ怒りを表す選手たち。

雅二はじっと動かないが、手だけは小刻みに震えている。

### ○ 大木家・寝室(夜)

ハッと目を覚ます雅二。  
隣を見るがもちろん、くみ子はいない。  
雅二「……」

○ 同・居間(夜)

雅二が仏壇の前で手を合わせている。  
階段から亜美が降りてきた。

雅二「(気付き) お前も眠れんのか?」

亜美はうなずいて横に座る。そして合掌をする。

雅二もまた手を合わせる。

遺影のくみ子は、ほほえんでいる。

○ 大阪市民会館小ホール・表

雲ひとつない晴天。

看板に『還暦ファイト』の文字。

ヒトがどンドン入っていく。

○ 同・控え室

大部屋に出場者や関係者が集まっている。  
そこで、シャドーをしてウォーミングアップしている雅二。

目に闘争心が宿っている。

亜美は少し離れたところに立っているが、殺気があつて近づけない。

丸山は隣でアドバイスを送る。

丸山「前半は体力温存で行きましょう。優勝するには3回勝たないといけませんから」

雅二「……」

丸山「ガードもきちんと上げて」

そこに負けた選手が戻ってくる。

顔面が腫れあがり、耳から出血している。

亜美「(目で追い)……」

丸山「(雅二に) 危なくなったら、すぐタオル投げますね」

無言のままシャドーを続ける雅二。

○ 同・会場

出場者の家族が多く、客席のほとんどが埋まっている。

最前列に谷がいる。

小走りできた亜美が隣に座る。

谷 「もう始まるのに、どこ行ってるねん」

亜美 「ごめんなさい」

リング上には相手選手が上がっている。

アラ還とは思えないマツチヨだ。

谷 「(対戦相手を指さし) 見てみ、化けモンみたいなカラダしとんぞ」

亜美 「胸なんて、Dカップはありそうだわ」

谷 「冗談言う余裕あるやんけ。ワシは緊張で心臓バクバクや」

亜美 「私もさつきからトイレばっかり行ってます」

谷 「ダイちゃんの試合見るの36年ぶりやけど、これを最後にしてもらいたいもんやで」

『ロッキー』のテーマ曲が流れてくる。

谷 「来たで」

亜美 「おじさん？」

谷 「ああ、オリンピック目指してた頃に流行ってた映画のや。一緒に見たけど、ワシは全然つまらなかった」

亜美と谷が花道を振り返る。

雅二が登場入口から出てきた。

プレゼントされたトランクスとランニングを着て、頭にヘッドギアをつけている。体はだいぶ絞られている。

後ろに丸山を従えている。

雅二は前だけを見て、進んでくる。

そしてリング脇の階段を登る。

亜美も谷も緊張して、声をかけられなかった。

## ○ 同・リング

光が強く、リング上はまぶしいくらいに照らされている。

両サイドに分かれた選手とセコンド。

雅二は落ち着いている。

一方、丸山はそわそわと落ち着きがない。対戦相手は、ボディービルダーのような鋼の肉体がテカテカと黒光りしている。

客席の亜美と谷の姿も見える。

レフリーが手招きをして呼ぶ。

レフリー「両選手、中央へ」

選手とセコンドが来るが、誰も注意事項を聞いていない。

説明が終わるとレフリーが二人のグローブを持って、合わせる。

両選手が軽く頭を下げ、コーナーに戻っていく。

丸山「相手を倒す必要はないです。フットワークで距離をとって、焦らずじっくりと」

適当にうなずく雅二。

丸山「何度も言いますが、危険な場合は止めますからね」

返事をせず、丸山から奪うようにマウスピースをくわえる。

するとゴングが鳴った。

カンッ！

それと同時に飛び出す雅二、相手に左右の連打を浴びせる。

対戦相手は防戦一方。

盛り上がる会場。

相手選手は抱き着いてクリンチで逃げる。だが離れると、またも雅二が襲いかかる。

その時、相手がパンチを出した。それが雅二に当たる。

グラつき、そこからお互いのパンチの応酬になる。

丸山「ガードガード」

聞かずに打ち合う雅二。

一進一退で両選手とも、パンチが顔面をとらえる。

客席の谷は興奮して叫ぶ。

亜美は黙ってじつと見ている。

セコンドの丸山は頭を抱えている。

丸山「これはボクシングじゃなく、ケンカですよ」

対戦相手もむきになって打つが、空振りを繰り返す。

雅二も勢い余ってロープから飛び出す。



二人、もつれ合って倒れるなど空回りな試合。

しかし観客は大盛り上がり、そして1ラウンドは終わった。

割れんばかりの拍手の中、コーナーに戻る両選手。

歓声に、軽く手をあげて応える雅二。だが肩で息をして、すでにへばっている。

丸山「作戦通り、完璧ですね」

マウスピースを取って喋る雅二。

雅二「ああ」

丸山「お客さんはおもしろがってますよ」

雅二「俺はもつとおもろいで」

丸山「……」

客席の亜美と谷を確認する雅二。

二人は心配顔だ。

カンとゴングが鳴る。

1ラウンドと逆で、相手選手がラッシュを仕掛けてきた。

雅二はガードをするが、何発か被弾してしまう。

丸山「逃げて、逃げて」

ロープに追い詰められ、手が出せない。

あまりに打ち返さないので、レフリーが止めてスタンディングダウンを取る。

レフリー「ワン、ツー、スリー」

雅二、ファイティングポーズをするが鼻血が流れている。

相手はコーナーで、今にも襲いかかろうと待っている。

レフリー「まだ、やれるか？」

雅二「いけます」

レフリー「よし。ファイト！」

突撃してくる対戦相手。

またもガードだけで、打たれっぱなしになる。

しかし雅二の目は死んでいない。

亜美は見ているのがツラそうだ。

谷は「あー」「おー」「わー」と叫び、

立ったり座ったりと忙しい。

丸山「スウェー、スウェーでよけて！ 回つて、足つかって！」

レフリーが雅二の顔を何度も確認している。

そして試合を止めようと近づいた瞬間。

初めて亜美が大声を出した。

亜美「おじさん、殴れ！」

声援が届いたかのように、雅二の右カウンターが飛び出す。

見事、テンブルをとらえた。

尻もちをつく対戦相手。

ワアーと館内が沸く。

レフリー「スリー、フォー、ファイブ」

立ち上がる相手選手。

レフリー「ファイト！」

突進する雅二、相手もパンチを返す。

お互いのストレートやフックが当たり、

血や汗が飛び散る。

激しい打ち合いだ。

カーンとゴングが鳴る。

二人とも、くたくたでコーナーに戻る。

丸山「こうなったらKO勝ちして下さい。もう、どうなってもタオル投げませんから」

うなずきながら、深呼吸を繰り返す雅二。

完全にスタミナ切れで、疲れきっている。

雅二「どうせ老い先短い。リングで死ねたら

本望や」

丸山「私にはローンを払い続ける未来が待つ

てます。大木さんには亜美ちゃんがあります」

客席を見ると祈るような目で亜美と谷が

見ている。

雅二、フンと鼻で笑う。

丸山「どうしたんです？」

雅二「アイツらにも楽しんでもらいたいねん

けどな」

丸山「家族は無理ですよ」

雅二「家族か……」

ゴングが鳴り、最終ラウンドが始まった。

お互いが飛び出し、リング中央で打ち合

う。

ガードを下げ、ボクシングというより殴り合いといった感じ。

会場は盛り上がり、セコンドの指示も聞こえない。

どちらのパンチも当たったたび、「おー」

と客から声が漏れる。

徐々に押され出す雅二。

もう体力が残ってないのだ。

対戦相手も目尻から血が出てきた。

丸山「抱き着け！ クリンチクリンチ！」

と興奮してリングを叩く。

雅二は相手にくつついた。

それを嫌がり突き放される。

しかし、その離れ際を狙っていた雅二の左フックが当たり相手選手がグラついたチャンスと思い、前に出るが逆にパンチをもらう。

お互い効いている。

残り時間を確認する雅二、ラスト30秒だ。

ここだと思いいラッシュをかける。

対戦相手がボディを嫌がった。

もう一発入れようとした瞬間、アッパー

カットをアゴに食らう。

棒立ちになる雅二。

亜美・谷「あ！」

そこへ、もう一発アッパーをもらう。

雅二がゆっくり膝をついてダウンする。

一瞬、シンとなる館内。

そして沸く。

雅二、すぐに立ち上がろうとロープを掴む。

そのロープ側の客席に亜美、谷、そして一生懸命に応援するくみ子の姿があった。気合いを入れ直し、立ってファイティングポーズをとる雅二。

だがレフリーは両手を左右に振り、試合を止めた。

客はブーイングするがゴングが連打され、

雅二はKO負け。

雅二「(レフリーに) できる。まだできるー！」

と必死な形相で迫る。  
コーナーから丸山が飛び出てきて、雅二を止める。

雅二「俺は負けてへん！」

丸山が無理やりコーナーに連れていく。  
その雅二の足取りはフラフラでまったく力が入っていない。

客席の谷はうつむき、亜美は大粒の涙をポロポロ流している。

雅二、くみ子が座っていたところを見る。しかしもういない、やはり幻だった。

相手選手は流血をタオルでぬぐいながら、花道を帰っていく。

こちらにも真っ直ぐ歩けず、とても勝った選手には見えない。

### ○ 同・控え室

忙しそうにみんなが動き回る中、雅二はバンテージを手に巻いた状態でじっと座っている。

そこに谷が入ってくる。

谷 「お疲れさん」

雅二「……」

谷 「そろそろヘルパーさんが帰る時間やから、先行くわ」

と去っていく。

雅二が顔を上げ、目の前の鏡を見る。

顔はボコボコに腫れ、鼻血がタラリと流れる。

雅二「……」

### ○ 同・表

亜美がひとりで待っている。

雅二と丸山が出てくる。

丸山「タクシー、呼びましようか？」

首を左右に振る雅二。

丸山「私は、まだ用事がありますから戻りませんね。(亜美に) あとは頼んだよ」

亜美「はい」

丸山「本当にいい試合を見せていただき、勉

強になりました」

雅二「……」

丸山「では、お疲れさまでした」

と頭を下げ、中に戻っていく。

亜美「少し休んでから帰る？」

雅二は黙ったまま歩きだす。

### ○ 走る電車・車内（夕）

外の街並みが、夕陽で真っ赤に染まっている。

雅二と亜美、吊り革を持って流れる景色を見ている。

酔っ払いのジジイが、唸り声を上げながら車内をうろついている。

他の乗客たちは車両を移動する。

二人は気にせず、空いた席に並んで座る。駅に止まると、酔っ払いは出ていった。

### ○ 近鉄奈良駅・表（夕）

階段を上ってくる雅二と亜美。

雅二は呼吸が荒く、足を上げるのもツラそう。

それに気づく亜美。

亜美「タクシー乗りましょうよ」

首を横に振り、歩き続ける雅二。

亜美は心配顔でついていく。

### ○ 奈良公園・園内（夕）

観光客は駅のほうに向かって歩いている。鹿もほとんどいない。

逆行するように雅二と亜美が進む。

雅二がようやく口を開いた。

雅二「……遠い昔みたいやで」

亜美「ん？」

雅二「ガンの手術が決まった日。病院の帰りにアイツと、この道を歩いたんや」

亜美「おばさんと？」

雅二「(うなずき) あれから、たった二か月しか経ってへん」

亜美「……」

雅二「まさか20年一緒に暮らした人間がおらんなんて、ちよっと前に初めて会った子と歩くとは思ってもなかった」

亜美「うん」

雅二「その上、ボクシングまでやりだして、素人のおっさんにKO負けや。人生は分かんもんなやな」

と自嘲気味に笑う。

亜美「痛かった？」

雅二「やってる時は平気。今はめっちゃ痛い」

初めて笑顔になる亜美。

雅二「ボクシングの試合って、やると最高に気持ちいいんやで」

亜美「私も始めようかな。今日の試合見て、カッコいいと思った。リング上であんなに」

雅二が亜美のほうを向いて、立ち止まる。

亜美も止まる。

亜美「(驚き) どうかした？」

雅二「女の子がせんでええ」

亜美「今は女子ボクシングも」

雅二「(ささげり) 亜美は亜美の人生を歩け。

これからは大人を喜ばす必要はない。人生、そんな余裕な時間は無いぞ」

亜美「……分かった」

雅二「夢はないんか？」

亜美「夢？ ない」

雅二「やりたいことは？ 欲しいものは？」

亜美「……早く大人になりたい」

雅二「急がんでもええ。来年は、まだ六年生やないか」

考え込み、空を指さす亜美。

雅二「(上を見て) なんや？」

亜美「天体観測とか好き。星座は小さい頃から興味あって」

雅二「それでええがな」

亜美「昔おもちやを買ってもらえなくて、それで星をよく見るようになった。だから、すごく詳しいの。もっと勉強してみたい」

雅二「立派な夢や」

雅二たち、また歩きだす。

亜美「なんで作戦通り戦わなかったの？」

雅二「本気で優勝する気やったからな」

亜美「それなら、アウトボクシングっていうの？ 足を使って距離を取りながら」

雅二「それは無理や。一日に3試合するスタミナなんかない」

亜美「もしかして」

雅二「そうや、全試合1ラウンドで。それも一分で倒そうと思った。そしたら、このザマや」

亜美「勝った選手ね、次の試合棄権したの。」

ボクシングが怖くなったって」

雅二「代わりに出たかったわ」

亜美「その顔じゃ勝てないよ」

雅二「お前、言うやんけ」

亜美「なんで試合に出ようと思ったの？」

雅二「生まれ変わるため」

亜美「生まれ変わる？」

雅二「一皮むけるんや。初老の脱皮やな。ハッハッハハ」

と笑う。

亜美も笑うが、止まらない。

雅二「そんなにおもろいか？」

亜美「(首を横に振り) おじさん、丸坊主だと大仏ていうかお坊さんみたい」

雅二が亜美の顔をじつと見つめる。

亜美「ごめん、怒った？」

雅二「(真剣に) 絶対に笑わんとつてくれよ」

亜美「(うなずき) う、うん」

雅二「試合中にな、アイツが客席に座ってるのを見せてん」

亜美「やっぱり」

雅二「お前も見えたんか？」

亜美「ううん。でも、いるような気がしたの。おじさんの試合を一番見たいはずだもん」

鹿の親子が二人の前を通り過ぎる。

雅二「アイツ、お前の目が子鹿にそっくりて言うてたけど。今は、大人の鹿に近くなってきたな」

亜美「成長したんだよ」

雅二「そやな」  
亜美「おじさんもね」  
雅二「俺も成長期か」  
二人、笑う。

○ 大木家の近くの道（夜）

家々に明かりが灯りだした時間。  
雅二と亜美がやってくる。  
夏の虫の鳴き声と、雅二の足を引きずつて歩く音だけが聞こえている。  
雅二「……もうすぐ夏休みやろ。行きたいところあるか？」  
亜美「私、お墓参りに行きたい」  
雅二「両親か」  
亜美「お婆さんの」  
雅二「そっちか」  
亜美「私、お婆さんが好きだったから」  
雅二「……」  
亜美「一回も行っていないの、ずっと気になつてる」  
雅二「年寄りみたいなこと言うな」  
亜美「だって、ホントだもん」  
雅二「一緒に行ったらアイツも喜んでくれるやろうな」  
亜美「絶対そうだよ」  
少し間がある。  
雅二「あのな……」  
亜美「なに？」  
雅二「言うの忘れてたけど……」  
亜美「うん」  
雅二「嫌やなかったらな……」  
亜美「……」  
雅二「ずっと家におつてもええぞ」  
亜美「ありがとう」  
二人、真つ直ぐ前を向いて歩いていく。

○ 大木家・表（夜）

谷と車いすに乗った伝次郎が待っている。  
玄関先に、ひまわりの札の刺さった植木鉢が置いてある。



茎は腰あたりまで伸びている。  
そこに帰ってくる雅二と亜美。

谷 「遅いわ。待ちくたびれたで」

雅二 「すまんな」

伝次郎が雅二と亜美の顔を交互に指さす。

雅二 「どうしました？」

伝次郎 「やっぱり親子は顔が似とる」

雅二 「……」

亜美 「……」

谷 「(焦り) 全然似てないがな。二人はな」

雅二 「(さえぎり) そうやろ、そっくりやね

ん」

伝次郎 「ああ、どここのう似とるわ」

一同、笑顔になる。

雅二 「(亜美に) ぐ飯あるか？」

亜美 「今日は田村屋のコロッケをたくさん買

ってる」

谷 「ええ奥さんなれるで」

亜美 「自分でもそう思う」

雅二 「口はアイツにも負けてへんわ」

谷 「ホンマ。ダイちゃんに新しい嫁は当分

いらんな」

亜美がカギを開け、五人は中に入ってい

く。

真つ暗な家に明かりがつき、騒がしい声

が聞こえてくる。

空には満点の星が輝いている。

遠くで、お寺の鐘がゴーンと鳴った。

(了)